

CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

認知症および認知機能障害の疫学的研究

～老化・老年病に関する長期縦断疫学研究 (NILS-LSA) から～

予防開発部

下方 浩史 部長

平成 23 年 4 月 14 日(木) 午後 4 時 00 分～

研究所 2 階会議室

老化に関する長期縦断疫学研究は一定の集団を長期にわたって縦断的に追跡し、老化による身体機能や精神活動の変化についての詳細なデータの集積することを目的にしている。縦断研究は老化に関連する健康問題や正常な老化による変化を明らかにするだけでなく、認知症や骨粗鬆症などの老年病の実態、発症のリスクファクター、予防と早期診断の方法を見出すために重要である。平成 9 年に開始した「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究 (NILS-LSA)」は現在 15 年目を迎え、第 7 次調査を実施している。対象者は長寿医療研究センターが所在する大府市と東浦町から性別・年齢群別に層化無作為抽出された 40 歳以上の地域在住男女約 2,300 名であり、2 年ごとに追跡されている。毎日 7 名の参加者が調査センターで検査を受け、老化に関しての詳細な質問票、診察、生理機能検査、身体計測、運動機能、栄養調査、心理調査が実施されている。これらのデータを縦断的に解析し、遺伝子多型、身体的および心理的要因、生活習慣および環境要因などの老化、老年病についての影響を解明している。この縦断的研究のデータから地域在住中高年者の知能の縦断変化の様相や関連要因について検討した。

認知機能は、知識や長期記憶、概念については 70 代まで保たれているが、計算や物品名の想起、情報処理のスピードや正確性は 70 代から低下していた。認知機能の加齢変化に関連する要因の中で予防的に働く要因は社会心理的要因（高学歴、社会的訓練、社会的交流や学習の機会、趣味、生き甲斐、性格、再就職）や生活習慣（抗酸化ビタミンの多いバランスのとれた食事、適度な飲酒、禁煙、適度な運動）であり、危険因子となるのは高血圧症、糖尿病、脂質異常症、喫煙などであった。これらの結果から、生活習慣や心理社会的要因の改善が、中高年者の認知機能の保持・増進に役立つ可能性が示唆された。

連絡先: 認知症先進医療開発センター
センター長 柳澤勝彦(内線 5002)